様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｈ０３４０９

研究課題名（和文）社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として

研究課題名（英文）How can Sociology be Regenerated as a Discipline--Quest through Durkheimian Case

研究代表者
中島　道男（NAKAJIMA, MICHIO）

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：１０１４４６３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,500,000円

研究成果の概要（和文）：現代の社会学はディシプリンの固有性が揺らぎ、発信力や教育力の低下、学徒減少などの危機に直面している。この危機に取り組むには、社会学の構築過程と展開を解明する「自己反省の社会学」を深化させなければならない。そこで本研究は、ディシプリンの確立を成し遂げたデュルケーム社会学を事例として、①起源の解明、②継承・批判の研究、③受容状況の国際比較研究、④社会学教育法の研究と実践という４側面の研究を進め、論文25本、学会発表16本、単著3冊の成果を上げるとともに、国際シンポジウムの開催やニュースレターの発刊をした。成果はデュルケーム命題集（2019年度刊行予定）や論集（全25章脱稿済）として結実しつつある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　社会学がひとつの専門科学であることを自明視せず、１）それが起源においていかに可能となったのか、２）いかに批判的に継承されたのか、３）西洋発の科学がその外部でいかに受容されたのか、４）専門性を担保するのはいかなる教育実践なのか、という問題系に分解し、総花的にではなく、デュルケーム社会学に特化する形でディシプリン性とその揺らぎに、社会学的課題として取り組んだ点に学術的意義がある。
　社会的意義は、社会の中にあるものとしての大学における諸学問のさまざまなあり方を再考する契機を提供する点にある。なにがいかに学問的に探求されるべきか。効率や面白さにとどまらない判断材料を社会は必要としているのである。

研究成果の概要（英文）：Today, sociology is facing a crisis. Crisis in which its uniqueness as a discipline becoming vague, power to appeal itself to the outer world getting weak and the number of sociology students turns out be less and less. To cope with this crisis on a fundamental level, it is necessary to deepen a "self-reflexive sociology" which elucidates the construction process and deployment of sociology. For this purpose, the sociology we focused on was that of Emile DURKHEIM with the following perspectives: 1) how he succeeded in establishing the discipline in France, 2) how his sociology was interpreted and transmitted by the subsequent generations, 3) how his sociology was accepted outside France, and 4) what kind of sociology education has been and should be done.
During four years of study, we succeeded to produce 25 article and three books. On top of that, we are now getting ready to publish two books, one is an academic research work and the other a textbook on E. Durkheim.

研究分野：社会学

キーワード：社会学　デュルケーム　ディシプリン　社会学教育　フランス社会学　社会学の国際受容　大学教育　学問論

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

社会学は、社会の変化に応じて学問領域を拡大・細分化することで発展してきたが、理論・方法が多様化し、研究対象が拡散するなかで、ディシプリンの固有性が揺らぎ、発信力や教育力の低下、学徒減少などの危機が生じている。たとえば、日本学術会議社会学委員会が発表した報告書「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準：社会学分野」(2014)は、ディシプリン問題に対する社会学からの一つの重要な応答といえるが、それをさらに深化させる必要がある。

２．研究の目的

上記１．に記したような「危機」に取り組み、社会学の自己認識・自己反省の営みをさらに奨めるため、デュルケーム社会学を事例として現代社会学のディシプリン再生に必要な知見を明らかにしつつ、さらに、ディシプリンの再生に資する社会学教育研究に実践的に取り組むことを目的とする。

３．研究の方法

ディシプリンの確立を成し遂げたデュルケーム社会学を事例として取りあげ、文献研究・海外の社会学者へのインタビュー・シラバスの検索と分析・教育媒体の制作・シンポジウム開催などの手法を用いつつ、以下の４つの研究の柱を同時並行的に推進するという方法によって、上記２.の達成をめざす：①【起源の解明】多種多様な“sociologie”論から制度的な「社会学」が成立した過程の解明、②【継承・批判の研究】学説の批判・再解釈を通じた継承によるディシプリン強化や変容の過程の検証、③【受容状況の研究】国際調査による各国でのデュルケーム学説受容状況の比較研究、④【社会学教育方法の研究と実践】内外の社会学教育（学説・理論教育）の状況を調査・分析し、新たな教育媒体や教材を開発。

４．研究成果

（１）【起源の解明】「『社会学的方法の規準』（1895）成立とその周辺の解明」というテーマ設定の下、デュルケームのテキストの内在的理解とコンテキストの理解、フランスにおけるデュルケーム研究の最前線の掌握、他分野(哲学、経済学)との接点の解明などを行なうとともに、『社会学的方法の規準』の新訳刊行（講談社）も達成した。具体的にはテキスト理解の前提となるコンテキスト理解の問題として、フランス第三共和制期の独自性、特にライシテ(laïcité)との絡みからデュルケームの「社会」概念の出自を探った研究及び実証概念とエピステモロジーとの相関問題の研究(太田)、哲学分野との接点としてデュルケーム以前の思想家でフランスのニーチェともいえる G.M.ギョー(Jean-Marie Guyau,1854-1888)あるいは A.フイエ(Alfred Fouillée,1838-1912)に焦点を当てた研究(北垣)、ベルクソンとデュルケームとの共通点の方に着目し、そこから逆照射して言語問題を考察した研究(小関)、タルド像の厳密な再構成から改めてデュルケームと比較した研究(池田)、デュルケームの政治哲学とそこから「実践」の問題を剔抉した研究(赤羽)、フランス経済史からみたデュルケーム社会学研究(吉本)、などである。ちなみに G.M.ギョーの思想はライックな道徳の構築の際、プロテスタントでありながら極限まで自由を尊重し、ライシテによる文教政策の推進者であった F.ビュイッソン(Ferdinand Buisson,1841-1932)に大きな影響を与えていたことが最近判明した。またベルクソン研究、哲学研究の立場からデュルケーム社会学研究のあり方に対して、その結果としての生産物(社会学理論)に焦点を当てる研究以外に、その結果を生産する手前にあるデュルケームの発想や仕掛けの方を研究する重要性が問題提起された点も付記しておきたい。

■成果論文（刊行準備中、脱稿済）第１部：デュルケム社会学の成立と社会学の制度化

第 1 章 デュルケーム社会学とエピステモロジー――デュルケーム社会学のディシプリンを支える「科学性」の問題 太田健児◆第 2 章 フイエとギュイヨー――デュルケームの先駆者たち 北垣徹◆第 3 章 永遠の真理と変化する実在――デュルケムとベルクソンにおける言語的観念の役割 小関彩子◆第 4 章 犯罪の正常性をめぐるデュルケームとタルドの論争 池田祥英◆第 5 章 社会学という実践――デュルケームにおける社会の客観性をめぐって　赤羽悠

（２）【継承・批判の研究】2015 年度と 2016 年度は、デュルケーム社会学が社会学・人類学・思想の分野でどのように批判・継承されたかを解明する作業を中心に研究を進めた。重点を置いたのは、デュルケーム学派の継承の過程のなかで、社会学と隣接分野がどのように分節化されてきたのかを明らかにすること、〈社会の生成〉の理論化に着目してデュルケーム学派の仕事を読み直すこと、批判的継承の中で失われたものや非明示的に継承されたものに着目し、後代の研究をとらえかえすことである。この作業を通じ社会学の固有性を次のように命題化した。①「社会学は非合理的なものと合理的なものの関係を探求する」、②「社会学は抽象的な人間理解からはこぼれ落ちる人間や現象の具体性・具象性に注目する」、③「社会学は理解不可能に見える他者の理解を志向する」。論文としては中島道男「デュルケムの『国家‐中間集団‐個人』プロブレマティーク」（2016）などが発表された。2017 年度は研究成果の発信に力を入れた。本科研主催の国際シンポジウムでは、岡崎宏樹が「非合理性と流動性――社会学の境界で考える」（9/18：日仏会館）、江頭大蔵が「個人と社会の相互浸透性と異質性」（9/21：キャンパスプラザ京都）を報告した。班長が企画した日仏社会学会大会シンポジウム（10/28：一橋大学）「マ

ルセル・モースと現代」では、古市太郎が「『制度の狭間』で考える――MAUSS の『贈与論』解釈を通じて」を報告した（次年度に論文として発表）。また、三上剛史が「『贈与論』の問題圏と“贈与”の神話」（2017）に続き、「『贈る』行為の両義性――『贈与論』再考：モースからジンメルそしてルーマンを経由して」（2018）を発表。村田賀依子「ハビトゥス・状況・行為――『ポテンシャリティ』に着目してブルデューを読む」（2017）、江頭大蔵「個人と社会の異質性とディシプリン変容」（2018）も発表された。最終年度の 2018 年度は、日本と欧米の学説研究の差異を検討し、４年間の研究を総括しつつ、各メンバーがディシプリンの変容過程に関する研究成果を報告書にまとめる作業に取り組み、下記の諸論文を完成させた。
■最終成果論文（刊行準備中、脱稿済）第 2 部：デュルケム社会学理論のインパクト
第 6 章 デュルケーム社会学の 21 世紀――モース『贈与論』と現代社会学の出会い 三上剛史◆第 7 章 社会学の固有性について――経済社会学・MAUSS の歩みとそこからの展開 古市太郎◆第 8 章 個人と社会の異質性とディシプリンの変容 江頭大蔵◆第 9 章 デュルケーム学派と心理学――デュルケームとアルヴァックスを中心に 金瑛◆第 10 章 デュルケムとベルクソン――社会の内在性と超越性をめぐって 笠木丈◆第 11 章 聖なるもの、沸騰、事物――デュルケーム宗教論再考 溝口大助◆第 12 章 体験理解の方法論的探求――デュルケームからバタイユへ 岡崎宏樹◆第 13 章 パーソンズのデュルケム解釈――パーソンズの主意主義的行為理論をめぐって 杉谷武信◆第 14 章 デュルケームの宗教論からブルデューの国家論へ――「社会とは神である」をめぐって 村田賀依子◆第 15 章 100 年後のデュルケム――バウマンの批判に応えて 中島道男

（３）【受容状況の研究】デュルケームをはじめとする古典的社会学が非ヨーロッパ語圏をふくむ各地でどのように受容されているかについて調査・研究を進めるべく、複数の調査チームを組み、韓国・スペインにおいて聴き取りを含む現地調査を実施した。また国内でのインタビュー、外国文献などを通じて台湾、トルコの状況も把握した。スペイン調査においてはバルセロナの複数の大学で聴取りと意見交換を実施した。デュルケームに限らず古典的な社会学は現在の基本的な文献として尊重されているが、教育とりわけ初学者向けの教育にあたっては古典を学ぶというよりも現代社会を考えるうえでどのように「使える」のかを中心に触れられることが多いとのことであった。韓国調査においてはソウルの大学でデュルケーム理論を中心に研究する研究者の協力を得て聴取りと意見交換を実施した。こちらではデュルケームの理論は現代社会の問題を解明するツールになりうるとの所見を得た。台湾については来日中の台湾人研究者の協力を得て聴取り調査を実施した。台湾ではアメリカに留学して帰国した研究者を中心にして社会学の研究が始まったという事情もあり、どちらかといえば 20 世紀のアメリカ社会学がベースとなって今は台湾社会を対象とする研究が重視されているとのことであった。トルコについては文献研究を通じてトルコの社会学教育においてデュルケミアン的な発想がどのように生かされたかを中心に検討を進め、下記の諸論文を完成させた。
■最終成果論文（刊行準備中、脱稿済）第 3 部：デュルケム社会学の国際的受容
第 16 章 東アジアでのデュルケーム受容と「圧縮された近代」中倉智徳◆第 17 章 韓国調査報告――キム・ミョンヒ氏インタビューより 林大造◆第 18 章 バルセロナ三大学調査について 川本彩花 吉本惣一 藤吉圭二◆第 19 章 トルコの大学における社会学教育の制度化とデュルケーミスム――ズィヤ・ギョカルプ（Ziya Gökalp）の活動を中心に 横井敏秀

（４）【社会学教育方法の研究と実践】日本・フランス・英米・ドイツ等における社会学テキストやシラバス、また学術雑誌に掲載されたデュルケームに関わる論文の検討等を通じて、大学教育におけるデュルケーム社会学の位置づけや、デュルケーム社会学の「古典化」の過程、社会学の理論の背景をなす社会学者の伝記的な側面についての記述のあり方などに着目しながら研究を進め、その成果は、学術論文、日本社会学会をはじめとする諸学会での報告などを通じて積極的に発表してきた。４年間の研究を経て、次の諸点を明らかにすることができた：①学問分野の主要な刊行物や業績とは見なされにくい存在である「社会学教科書」が、a.すべての学生が社会学に関して有するべき基礎的な知識、b.同時代の普通の社会学者の間で当然の事柄と見なされるもの、c.重要視されている著作や著者、の指標としての役割を果たす資料たりうること、②ディシプリンに関する考察を教科書に着目して行うことの妥当性、③日本の教科書：没後百年を迎えたデュルケムの社会学が、「連帯」「自殺」などの具体的な概念とともに、他の学問とは異なるオリジナリティを問いながら継承されている、④日仏教科書比較：両国におけるデュルケームの取り扱われ方には、それほど大きな違いはない、⑤ドイツの社会学史と社会学理論の教科書に示された内容：a.デュルケームがフランスにおける社会学の制度的確立に寄与した、b.社会的事実に関する社会学の方法論的なカノンと、社会統合の問題という今日に至る問いを提起、c.社会理論の構成要素として分業の型を位置づけ、d.近代的な道徳学および道徳教育の基礎に社会学を据えたこと（日仏の教科書と通じる）、⑥社会学理論・学説を、その論者の伝記的背景と結びつけて学ぶ／教える場合があること、およびその含意の分析、⑦学術雑誌での扱われ方の検討を通じて、デュルケーム社会学がいかに「古典化」されたかの解明。
■最終成果論文（刊行準備中、脱稿済）第 4 部：社会学教育のなかのデュルケム
第 20 章「古典化」されるデュルケーム――1930 年代までのアメリカの社会学誌を中心に 小川伸彦◆第 21 章日本の社会学教科書の中で生きるデュルケム――デュルケム社会学のパースペ

クティブと概念をめぐって 横山寿世理◆第 22 章『デュルケームの論点』刊行に寄せて――E. デュルケーム没後 100 周年記念に 山田陽子◆第 23 章　社会学理論・学説の記述における伝記的背景――日本の社会学教科書の分析 川本彩花◆第 24 章ドイツの社会学教科書とシラバスに見るデュルケーム――社会学の方法論と主題設定に関して 梅村麦生◆第 25 章「社会学教科書の社会学」とデュルケーム 白鳥義彦

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２５件）

①江頭大蔵、2018、「個人と社会の異質性とディシプリンの変容」『広島法学』41(3): 256-274

②岡崎宏樹、2018、「非合理性と流動性――社会学の境界で考える」『日仏社会学会年報』29: 49-58

③小川伸彦、2018、「論文作成のエッセンス（上）――社会学教育の“痒いところ”に手を伸ばす」『奈良女子大学社会学教育研究論集』2: 12-16

④白鳥義彦、2018、「学問の制度化と大学におけるデュルケームの講座の位置――前任者たちおよび後任者たちの検討を通じて」『紀要』（神戸大学文学部）45: 65-76

⑤林大造、2018、「家庭教育支援法案の問題点と課題」『こどもの権利研究』29: 142-149

⑥三上剛史、2018、「「贈る」行為の両義性――『贈与論』再考：モースからジンメルそしてルーマを経由して」『追手門学院大学社会学部紀要』12: 1-18

⑦溝口大助、2018、「沸騰、贖罪、死――デュルケム学派宗教社会学における『聖なるもの』」『Νύξ=ニュクス』5: 110-135

⑧横山寿世理、2018、“How Can the Heritage and Legacy of Durkheimian Sociology Be Revived? : An Analysis of Sociological Textbooks”, 『聖学院大学総合研究所 NEWSLETTER』27(2): 40-44

⑨小川伸彦、2017、「内側と外側の関係を探求する教科としての公民科――社会学との関連性をめぐって」『教育システム研究』（奈良女子大学教育システム研究開発センター）別冊: 57-67

⑩Ozeki, Ayako、2017、“L'individualisme est-il un égoïsme?：L'énergie vivante s'incarnant dans la personnalité chez Bergson et Durkheim”, Shin Abiko, Hisashi Fujita, Yasuhiko Sugimura, Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIXe siècle, GEORG OLMS VERLAG: 247-266

⑪村田賀依子、2017、「ハビトゥス・状況・行為――「ポテンシャリティ」に着目してブルデューを読む」『日仏社会学会年報』28: 35-54

⑫横井敏秀、2017、「トルコ中等教育における社会学の制度化とデュルケーミアン・ズィヤ-ギョカルプ」『追手門学院大学社会学部紀要；Bulletin of the Faculty of Sociology, Otemon Gakuin University』11: 81-103

⑬横山寿世理、2017、「アルヴァックスに対するデュルケームの影響」『聖学院大学総合研究所 NEWSLETTER』27(1): 16-21

⑭中倉智徳、2016、「フランスにおける「イスラモフォビアの社会学」をめぐるノート――概念をめぐって」『生存学』９：120-127

⑮中倉智徳、2016、「社会学における倫理的自然主義の可能性について――フィリップ・ゴルスキ「事実／価値区分を越えて」論文を中心に」上掲藤原・中倉編『生存をめぐる規範と秩序』76-87

⑯藤原信行・中倉智徳編、2016、『生存をめぐる規範と秩序』、生存学研究センター報告 26、立命館大学

⑰岡崎宏樹、2015、「社会学と哲学――パースペクティブとディシプリンを考えるために」『日仏社会学会年報』26：69-90*

⑱白鳥義彦、2015、「デュルケームとナショナリズム、コスモポリタニズム――現代との応答」『日仏社会学会年報』26：91-104*

⑲中倉智徳、2015、「イノベーション、社会、経済――ガブリエル・タルドと戦間期アメリカにおける「発明の社会学」」『年報 科学・技術・社会』24：35-57

⑳中倉智徳、2015、「19 世紀末フランスにおける「科学の哲学」としての社会学――ガブリエル・タルドのネオ・モナドロジー成立過程」『フランス哲学・思想研究』20：15-28

㉑中島道男、2015、「デュルケムの「国家－中間集団－個人」プロブレマティーク」『日仏社会学会年報』26：47-67

〔学会発表〕（計１６件）

①笠木丈「タルドにおけるクールノーの受容について」（日仏哲学会 2019 年春季研究大会口頭発表、2019.3.23 於大阪大学）

②中倉智徳「社会運動の「モナド論的分析」の可能性について――Isaac Marrello-Guillamón による議論を中心として」（日本社会学会第 91 回大会口頭発表、2018.9.15 於甲南大学）

③Ozeki, Ayako, “The concept of personality in Durkheim: Generality, commonness, abstractness, and universality”, XIX ISA World Congress of Sociology, 2018.7.21, Metro Toronto Convention Center

④Nakakura, Tomonori, “Reception of Durkheim's theory in East Asia and Post-Western Sociology /Compressed Modernity”, The Inaugural Congress of East Asian Sociological

Association, 2019.3.9,Chuo University
⑤江頭大蔵「個人と社会の相互浸透性と社会の非個人性――デュルケームの視点から」(西日本社会学会第 75 回大会自由報告、2017.5.14 於松山大学)
⑥川本彩花「知識社会学的メディアとしての社会学教科書――ディシプリン再生と社会学教育②」(第 90 回日本社会学会大会一般研究報告、2017.11.4 於東京大学) 2017.4.15 於文京学院大学)
⑦林大造「文脈と依存から贈与を捉え返す――アドヴォカシーと連帯の視角から」(2017 年度日仏社会学会大会シンポジウム「マルセル・モースと現代」、2017.10.28 於一橋大学)
⑧藤吉圭二「贈与の葛藤を調停する――義務的であり自発的であることの意味」(2017 年度日仏社会学会大会シンポジウム「マルセル・モースと現代」、2017.10.28 於一橋大学)
⑨古市太郎「「制度の狭間」で考える――MAUSS の「贈与論」解釈を通じて」(2017 年度日仏社会学会大会シンポジウム「マルセル・モースと現代」、2017.10.28 於一橋大学)
⑩横山寿世理・梅村麦生「社会学教科書におけるデュルケム社会学の伝えられ方――ディシプリン再生と社会学教育①」(第 90 回日本社会学会大会一般研究報告、2017.11.4 於東京大学)
⑪岡崎宏樹「集合的沸騰の分析――溶解・拡大・連鎖」(第 55 回日本社会学史学会大会一般研究報告、2015.6.27 於京都大学)
⑫江頭大蔵「デュルケーム社会学理論の継承とディシプリンの変容」(西日本社会学会第 74 回大会自由報告、2016. 5.21 於保健医療経営大学)

〔図書〕(計９件)
①菊谷和宏、2018、『社会学的方法の規準』講談社(講談社学術文庫)
②中島道男、2018、『丸山眞男―課題としての「近代」』東信堂
③岡崎宏樹、2018、「相互作用と自己――〈自分らしく生きる〉とはどういうことか」奥村隆編『はじまりの社会学:問い続けるためのレッスン』ミネルヴァ書房: 19-35
④小川伸彦、2018、「都市とコミュニティ――都市研究には社会学のどんな姿が映しだされているか」奥村隆編『はじまりの社会学:問い続けるためのレッスン』ミネルヴァ書房: 165-182
⑤岡崎宏樹、2017、「知と権威/権力」日本社会学会社会学理論応用事典刊行委員会編『社会学理論応用事典』丸善出版: 564-565
⑥中倉智徳、2017、「微小な痕跡に残る社会――ガブリエル・タルドと筆跡の社会学」渡辺公三・石田智恵・冨田敬大編『異貌の同時代――人類・学・の外へ』平凡社: 49-71
⑦白鳥義彦、2017、「機械的連帯から有機的連帯へ」友枝敏雄・浜日出夫・山田真茂留編『社会学の力――最重要概念・命題集 Sociology : Concepts and Propositions』有斐閣: 218-221
⑧白鳥義彦、2018、「近代化・産業化と教育社会学」日本教育社会学会編『教育社会学事典』丸善出版: 44-47
⑨吉本惣一、2016、『蘇る『社会分業論』――デュルケームの「経済学」』創風社

〔その他〕ホームページ　社会学のディシプリン再生とデュルケーム
http://fjosh524.in.coocan.jp/discipline/

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名:小川 伸彦　ローマ字氏名:(OGAWA, nobuhiko)　所属研究機関名:奈良女子大学, 部局名:人文科学系, 職名:教授 研究者番号(8 桁):10242992
研究分担者氏名:太田 健児　ローマ字氏名:(OOTA, kenji)所属研究機関名:尚絅学院大学, 部局名:総合人間科学系, 職名:教授 研究者番号(8 桁):00331281
研究分担者氏名:岡崎 宏樹　ローマ字氏名:(OKAZAKI, hiroki)所属研究機関名:神戸学院大学, 部局名:現代社会学部, 職名:教授 研究者番号(8 桁):00329921
研究分担者氏名:藤吉 圭二　ローマ字氏名:(FUJIYOSHI, keiji)所属研究機関名:追手門学院大学, 部局名:社会学部, 職名:教授 研究者番号(8 桁):70309532
研究分担者氏名:白鳥 義彦　ローマ字氏名:(SHIRATORI, yoshihiko)所属研究機関名:神戸大学, 部局名:人文学研究科, 職名:教授 研究者番号(8 桁):20319213
研究分担者氏名:小関 彩子　ローマ字氏名:(OZEKI, ayako)所属研究機関名:和歌山大学, 部局名:教育学部, 職名:准教授 研究者番号(8 桁):10379604
研究分担者氏名:菊谷 和宏　ローマ字氏名:(KIKUTANI, kazuhiro)所属研究機関名:一橋大学, 部局名:大学院社会学研究科, 職名:教授 研究者番号(8 桁):40304175
研究分担者氏名:北垣 徹　ローマ字氏名:(KITAGAKI, toru)所属研究機関名:西南学院大学, 部局名:文学部, 職名:教授 研究者番号(8 桁):50283669
研究分担者氏名:江頭 大蔵　ローマ字氏名:(EGASHIRA, daizou)所属研究機関名:広島大学, 部局名:社会科学研究科, 職名:教授 研究者番号(8 桁):90193987
研究分担者氏名:三上 剛史　ローマ字氏名:(MIKAMI, takeshi)所属研究機関名:追手門学院大学, 部局名:社会学部, 職名:教授 研究者番号(8 桁):80157453
研究分担者氏名:古市 太郎　ローマ字氏名:(FURUICHI, taro)所属研究機関名:文京学院大

学，部局名：人間学部，職名：助教 研究者番号（8桁）：40578473
研究分担者氏名：中倉 智徳　ローマ字氏名：(NAKAKURA, tomonori)所属研究機関名：千葉商科大学，部局名：人間社会学部，職名：講師 研究者番号（8桁）：30586649
研究分担者氏名：林 大造　ローマ字氏名：(HAYASHI, taizou)所属研究機関名：追手門学院大学，部局名：社会学部，職名：准教授 研究者番号（8桁）：50565900
研究分担者氏名：横山 寿世理　ローマ字氏名：(YOKOYAMA, suzeri)所属研究機関名：聖学院大学，部局名：人文学部，職名：准教授 研究者番号（8桁）：00408981
研究分担者氏名：山田 陽子　ローマ字氏名：(YAMADA, yoko)所属研究機関名：広島国際学院大学，部局名：情報文化学部，職名：准教授 研究者番号（8桁）：10412298
研究分担者氏名：飯田 剛史　ローマ字氏名：(IIDA, takafumi)所属研究機関名：大谷大学，部局名：文学部，職名：教授 研究者番号（8桁）：10127045 [辞退]

(2)研究協力者
研究協力者氏名：赤羽　悠　ローマ字氏名：(AKABA, yu)
研究協力者氏名：安達　智史　ローマ字氏名：(ADACHI satoshi)
研究協力者氏名：池田　祥英　ローマ字氏名：(IKEDA, yoshifusa)
研究協力者氏名：梅澤　精　ローマ字氏名：(UMEZAWA, sei)
研究協力者氏名：梅村　麦生　ローマ字氏名：(UMEMURA, mugio)
研究協力者氏名：荻野　昌弘　ローマ字氏名：(OGINO, masahiro)
研究協力者氏名：笠木　丈　ローマ字氏名：(KASAGI, jo)
研究協力者氏名：川本　彩花　ローマ字氏名：(KAWAMOTO, ayaka)
研究協力者氏名：金　瑛　ローマ字氏名：(KIN, ei)
研究協力者氏名：杉谷　武信　ローマ字氏名：(SUGITANI, takenobu)
研究協力者氏名：速水 小島　奈名子　ローマ字氏名：(HAYAMI KOJIMA nanako)
研究協力者氏名：溝口　大助　ローマ字氏名：(MIZOGUCHI, daisuke)
研究協力者氏名：村田　賀依子　ローマ字氏名：(MURATA, kayoko)
研究協力者氏名：横井　敏秀　ローマ字氏名：(YOKOI, toshihide)
研究協力者氏名：吉本　惣一　ローマ字氏名：(YOSHIMOTO, soichi)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。